

我が国における仏教とキリスト教論争に関する思想史

——不干齋ハビアンの『妙貞問答』と

『破提宇子』

研究生 南部 千代里

東洋と西洋という地域的隔たりと発展してきた歴史的(過)程により、仏教とキリスト教は独自の文化圏を形成してきた。その二者が、あたかもわが国が東西の宗教や文化(を代)表する場所の如く上陸し、対立したのである。長い思想史において、高度に発達した宗教、しかも対照的な哲学を持つ)った二者が、直接論争した事例は他に類を見ない。例えば、中国では唐の時代景教は宣教を開始したが、唐末期には)滅亡している。韓国にも一八世紀に天主教が宣教されたが、)当時の韓国仏教は李王朝の斥仏政策により消滅寸前であつた。た為、天主教を相手にする余裕は全くなかつた。その後)小さな論争は起こつたが、思想史全体から見ると)中国、韓国における仏教とキリスト教との関係は、日本と)比較するならば消極的なものであつた。だがわが国において)は、キリスト教が伝来した一六世紀、仏教は衰退期に入)つていたとはいへ人々の精神生活において支配力を保持し)ていた。それ故激しい論争となつたのである。本研究は)これらを如実に反映している不干齋ハビアンの『妙貞問答』と『破提宇子』を

もつて、わが国における仏教とキリスト教論争に関する思想史を考察するものである。

不干齋ハビアンは、一五六五年北国に生まれ臨濟宗寺の小僧)となり、所化して慧春と称した。一九歳の時にキリスト(シタン)の)洗礼を受け、コレジオで七年間神学を修めイルマンとなる。彼は日本宗教すべてを、カトリックの教理をもつて批判し)た『妙貞問答』(一六〇五年)を著作した。だが翌年突如キリ)シタンを棄てる。幕府のキリストン禁制が厳しくなつたの)を機に彼は『妙貞問答』に正面から反論した『破提宇子』(一六二〇年)を公表した。それは關邪の書として、江)戸時代)を通じ読まれ続けた。

明治維新後、神道復興に立つ)新政府による神仏分離と(廢)仏毀釈の運動は、仏教に壊滅的な打撃を与えた。その中で)仏教は自らを近代化すると共に、政府の宗教政策と(正面か)ら対決しなければならなかつた。仏教は、失蹤したものを)回復せんと、その動力を先ずキリスト教に向け自己存在を)主張した。その時ハビアンの『破提宇子』は(仏教学者によ)つて復刻され、キリスト教批判の拠りどころとして再び注)目された。仏教とキリスト教の闘争の一部に過ぎなかつた)キリストン時代の論争と、明治のそれも、信仰の争いである)ことに変わりはないのだが、そこに取り上げられた論点を)比較すると、論争の形態が極めて相似したものである)ことは見逃し難い。何故ならキリストン時代だけでなく明治)においても、一神論と汎神論、

有神論と無神論との優劣が根（本）的な争いであつたからである。この意味において『妙貞（問答）』と『破提宇子』は、わが国の思想史上において重要な地位に立っているのである。